

ジオルジ論文 要 旨

主観性・主体性を研究することに伴う

方法論の移り変わりを乗り越える一つの道

アメデオ・ジオルジ

A m e d e o G i o r g i : Saybrook Graduate School

人間主体の諸経験と諸行動を研究するに当たって（今日の）主流心理学者たちが採っている四つの研究戦略を、主観性・主体性の現前を減少させているという理由で、批判した。主観性・主体性を誇張する傾向のある二つの視点をも批判した。主観性・主体性に向う均衡の取れた一つの接近を提出した。それは、（1）主観性・主体性には、「見えない」あるいは非感覚的な諸特性があり、それらは理論的に取り入れられなければならないと認める、一つの理論的視点を承認する。それはまた、（2）人間の主観性・主体性に向う均衡の取れた接近を適切に評価するためには、間主観的・間主体的次元が決定的であると強調する。主観・主体に依存した視点で、それ自身のもろもろの利益を実現できる視点こそが、客観性の達成のために要請されている態度である。

（本論文は、『現象学的心理学雑誌』に寄稿中である。）

主観性・主体性を研究することに伴う方法論の移り変わりを乗り越える一つの道*

アメデオ・ジオルジ セイブルック大学院大学

[吉田章宏訳 淑徳大学]**

I. はじめに

この論文の目的は、主流の心理学者たちがこれまで心理学的諸現象を研究するのに用いてきた方法の主要なタイプを論評し評価することです。私の基本的な論点は、それらの確立された諸方法は、主観性・主体性を扱う理論的な能力を持っていないという理由で、本質的に欠陥がある、ということになるでしょう。これらの確立された諸方法は、一つの自然科学としての心理学という脈絡の内部で展開されました。そこで、私の主張は、それらの方法総てが、いかなる心理学的現象にとっても不可欠な特質である主観性・主体性の現前を、増大させるよりもむしろ減少させてしまう、というものです。なぜなら、この[主観性・主体性という]概念は、適切な理論的明瞭化をされたことがこれまで無かったからです。私は、また、ここでの議論を、主流心理学者たちが研究を行う状況の型に限定し、また、心理学が自然科学の一つであるという考えを信奉する心理学者たちによって動機付けられた基本的な[研究の]戦略に限定したいと思います。私がこの問題を論じる自然科学の枠組みは、厳密な実験室状況を仮定する必要はありませんが、しかし、少なくとも、擬似的実験、測定とデータの統計的処理を前提するものです。問題は、そのような枠組みが、果たして、また、どのようにして、主観性・主体性の適切な理解に場を用意することが出来るか、ということです。従って、最初の課題は、主観性・主体性の存在を少なくとも承認し、少なくとも暫定的にでも、その基本的意味を確立するために、主観性・主体性の現象に直接に対面することです。

*この論文は、2003年8月13日に、スウェーデン、ストックホルム、Ersta & Skondal Hogskola において開催された、人間科学研究国際会議の第22回年次集會に於いてなされた、基調講演の改訂版である。

**この試訳は、愛知医科大学大学院看護学研究科開設記念・特別講演会「看護を担う未来のリーダーたちへ：看護現象を見つめて」2004年5月22日に、著者ジオルジ教授が講演者として来日されることを機会に、1980年以来の友である吉田章宏が、急遽、短期間のうちに試みたものである。杜撰な誤訳が含まれていることを恐れている。読者は、この試訳を通して、ジオルジ教授の真意を読み取るよう努められんことを、心から希望する。邦訳を許可されたジオルジ教授ならびに、この機会をご提供くださった愛知医科大学看護学部・高橋照子教授に感謝する。

*** 本試訳を、多少なりとも読みやすく、誤りを少なくするための改訳と校正の段階で、淑徳大学大学院博士課程・岡愛子氏のご協力を得た。ここに謝意を表す。

この論文において、私は、主観性・主体性 (subjectivity) という言葉を、次のような事柄を語るための、一つの総称的 (包括的) な言葉として用いることにします。すなわち、人間たち (persons) 、意識、経験、こころ (psyche) 、生きられた身体 (the lived body) 、自我 (ego) 、自己 (self) 、そして、私たちの生と気付き (awareness) を指示するようなその他の総ての言葉を、包括するものとして、です。明らかなことは、これらの言葉の間を区別することが出来ますし、また、最終的には区別しなければなりません、しかし、いまここでは、それらの総てが共有している事柄を強調したいのです。

私がここで用いている言葉の意味での、主観性・主体性とは、極めて重要な概念です。と言いますのは、この概念は、総ての人間科学の中心に位置しているからです。その [人間科学の] 中には心理学が含まれていますが、殊に、心理学がその関心を人間存在に向ける場合に、この [主観性・主体性の] 概念は [心理学の] 中心に位置し、極めて重要となるのです。これは、どこにでも見られますが、同時に、捉えがたい言葉です。人間科学の実践者は他者を敬い注意深く接しなければなりません。そして、人間科学の研究者もまた、他者についての知識を獲得することが問題である場合には、[まったく] 同様なのです。しかし、これらの課題の達成は、主観性・主体性についての、その否定から絶対化まで広がっている驚くべき幅のもろもろの信念の勢ぞろいを背景として、為されなければならないのです。主観性・主体性をしっかり捉えるということは、人間諸科学における鍵となる問題のひとつです。しかし、自然科学的心理学者たちは、この課題に適切な仕方で接近していなかったのです。

主流心理学者たちによって採用されている枠組みを前提とするとき、主観性・主体性はどのように姿を現すのでしょうか。そもそも、第一に、主観性・主体性は、「内的過程」あるいは「内的データ」を含むと理解されました。したがって、それは、当初は、可視性あるいは観察可能性の一つの問題でした。研究者は、参加者 [いわゆる「被験者」] 自身にだけ与えられている事柄 [過程あるいはデータ] を、どのようにして、顕在的にすることが出来るであろうか [という問題です]。第二に、個性の問題がありました。参加者 [「被験者」] は、おそらく、極めて独自の仕方では反応していたでしょう。では、研究者は、行動あるいは経験の個人的な様式を、どのようにして一般化出来るであろうか [という問題です]。最後に、自然科学的なものの見方は、因果関係を前提していました。しかし、科学がよりよく理解することを望んでいるところの日常生活においては、人々は、自らを、自由に行為しているものとして経験しています、あるいは、少なくとも、そのように自らを解釈しています。では、研究状況における参加者のもろもろの [能動的] 行為が刺激 (原因) に対する反応 (結果) として解釈されなければならないのに、発動力 (agency) は、どのようにして、承認されるであろうか [という問題です]。参加者の側の自発的な活動は、その理論的枠組みに含まれてはいなかったのです。このことは、急進的行動主義についても当てはまります。と申しますのは、確かに、Skinner (1953) は、自発 (emit) された行動を記述していますが、しかし、彼は依然として、自発行動は刺激によって制御されるものとして構想していたからです。したがって、主流心理学は、主観性・主体性を一つの方法論的問題として [のみ] とらえて、それに対面していたのです。主観性・主体性に対抗

するための、あるいは、それを避けて通るための、幾つもの戦略が展開されました。しかし、それ[主観性・主体性]を我がものとし、適切に扱うための、健全な理論は何も導入されなかったのです。以下では、この点を、はっきりとお示ししたいと思います。しかし、その前に、まず、主観性・主体性の意味の問題に対面いたしましょう。

II. 主観性・主体性の意味

「主観性・主体性」という名詞と、「主観的・主体的」という形容詞は、多様な意味と内包 (connotations) を持っており、その含意は、望ましくないものから賞賛すべきものまで、広がっています。「主観性・主体性」という名詞は、しばしば、人 (person)、自己あるいは自我の同意語として用いられ、通常は、肯定的あるいは中性的であると理解されています。形容詞「主観的・主体的」は、通常、軽蔑的に (pejoratively) 用いられ、偏り、あるいは、測定出来ないということを含意します。私は、心理学と哲学の事典5、6冊を調べてみたのですが、その中には、名詞「主観性・主体性」は見当たりませんでした。そこで、私は、「主観性・主体性」を次のことを意味するものとし、すなわち、それは、時には自発的に開始される個々人の諸過程であって、[それら個々人の]同一性に関係し、部分的に非感覚的あるいは不可視的な性格をもつために、簡単には公的に明瞭化することがしにくいもの、です。形容詞形[の「主観的・主体的」と言う語]は、同じ一冊の事典にさえ、繰り返し見つけることができました。それが意味するのは：「個々の生体に依存する」、「他の研究者たちによっては検証されえない」、あるいは、「物理的な器具による記録を許さない」などです (Warren, 1934, p. 265)。この形容詞形に連合しているこれらの意味は、専門的な事典にも通例見出されるものです。しかし、「主観主義」 (subjectivism) という語が通常載っている名詞形であり、それは、常に、「客観主義」 (objectivism) の反対語とされているのです。おそらく、そのことが、「主観性・主体性」 (subjectivity) という語が、辞書に載っていない理由なのでしょう。その占めるべき場を、「主観主義」の軽蔑的侮蔑的な意味が、奪い取ってしまっているのです。しかし、「主観的—客観的」というこの単純な対立はあまり助けにならないということに、直ぐ気づくことでしょう。

私たちの主要な関心が主観性・主体性の適正な意味にあることから、まず、「主観主義」という侮蔑的な語を扱い、それを処分することを試みましょう。この語には、鍵となる二つの意味があることが示唆されています (Sinha, 1969)。第一の意味では、主観主義は次のような考えを指示します。すなわち、真理 (the truth) は、個人的なという意味でパーソナルなものに過ぎず、したがって、真理は人から人により、場合から場合により、異なりうるという考えです。これは、明らかに、学術的な脈絡においては、語の否定的な意味における相対主義に導きます。しかし、我々が恥知らずにも[勝手に]意見を述べ自分の選択によって個人的な欲望を満たす場合には、日常生活においても、広く顕在化するものです。

主観性・主体性の第二の、より哲学的な意味は、ある自己中心的な視点を指示しますが、自我の独自に個人的な側面を取り入れるわけではない、とといいます (Sinha, 1969, p. 52)。ここでの基本的意味は、いかなる対象を経験する場合にもある

主観・主体を必要とすること、しかし、それは、ある具体的な、生きている個人というよりは、ある抽象的な主観・主体なのです。これは、主観的視点を採ることとして理解されます。しかし、この語の第一の意味におけるように主観主義的ではありません。そこでの主張は、世界の対象 (objects) を人が経験するためには、主観・主体依存性を要する、ということ、しかし、それは、偏見あるいは相対主義を含意しなくともよいが、しかし、それらを必ずしも排除はしない、というものです。

ある厳密な意味では、一つの対象の経験で、主観・主体に依存しないものは、存在しません。客観主義が主張しようとするのは次のようなことです。すなわち、人がある対象を経験するには、その対象それ自体を、それがあがるままに (as it is in itself) 経験すべきである。それは、あたかも、人間主観・主体は [欠落していて、まるで] 誰も経験してはいないかのように、というのです。しかし、経験する人間が欠如しては、いかなる対象 (object) も、知ることあるいは現前することが、できません。したがって、客観主義が私たちに採用するようにと勧める態度では、経験の対象は物神化 (reify) されます。つまり、経験している人間の視点やそれまでの経験を露にするかもしれない如何なる特質も剥ぎ取られるのです。これもまた、抽象に向かう一つの動きです。しかし、この抽象は、対象に基づいていて、経験する者への如何なる言及も排除するものです。ある経験する者が存在しているということは、誰もが知っているにもかかわらず、そうなのです。したがって、客観主義は一つの誤った理想なのです。なぜなら、その立場そのものが、それ[客観主義]をもたらすに要する事態を忠実に記述してはいないからです。仮にもし、客観主義が、経験する者の存在を取り戻そうと試みたとして、[その上で]なお、客観主義は対象それ自体 (the object in itself) を知るのだと主張したとすると、この主張は、それでもやはり誤りでしょう。なぜなら、それは、ある無限の過程の最後に到達したのだ、と主張しなければならないであろうからです。現象学者たちは、経験の地平構造からして、いかなる物的対象の知覚も、無尽蔵である[尽くすことが不可能である]ということを示してきました。物的対象以外の対象の経験も、たとえそれが非斜映的に (nonadumbrationally)、与えられているとしても、時間性のゆえに、[やはり]、尽くすことが不可能なのです。経験する者における対象性の構成は、少なくとも、視点性を認めることが必要ですし、それを認めると、主観・主体依存性を導き入れることになるのです。客観性は、客観主義的に解釈することは出来ないのです。

鍵となる問題は、したがって、ある経験された対象は、如何にして (how)、主観性・主体性を必然的に要請するか、しかも、それでいて、経験された対象が、偏り無く知られている、と主張できるような仕方で知られるのは、如何にしてであるか、ということを理解しようと試みることです。これが、主観性・主体性の知識を獲得する努力を取り囲んでいる総ての難しさ (vulnerabilities) を生み出している中心的な問題なのです。科学 (学問) は、客観的な知識を求めます。もろもろの自然科学においては、この課題は、諸事物と諸過程をそれらが現実にあるがままに捉えようとすることを意味します。そして、そこでは、主観性・主体性は、克服不能な問題を提起するこ

とはありません。ところが、もろもろの人間科学においては、客観的な理解とは通例、もろもろの主観的な表現を含む人間活動を捉えることを意味します。逆説は、科学者である人間たちが、他者たちの主観的表現を客観的に捉えるために、自らのもろもろの主観的な偏りを発揮しなくてはならない、ということにあるようです。これは、一見、もろもろの人間科学が直面しなければならない逆説的な課題のように思われます。このジレンマを解決するために既に用いられている幾つかの戦略を考察した後に、この問題に立ち帰ることにしましょう。

III. 不適切な戦略の四つのタイプ

a) 主観性・主体性の除去 このジレンマに対する判りきった解決の一つは、他者の主観性・主体性は関係ないと単純に宣言することです、———この場合、使われる言葉は通常、意識あるいは経験ですが、———そして、限定された諸条件の下での他者の顕在的な行動を分析することへと進んで行くことです。アメリカの行動主義者、John B. Watson(1912) と B. F. Skinner (1953) は、このアプローチを使いました。行動主義者の [心理学史上の] 運動は、意識や主観性・主体性の端的な (outright) 否定ではなかったこと、他者の行動の科学的な分析に意識は必要ない、という一つの否定に過ぎなかったことに、ご注目ください。しかし、行動主義者たちは、彼らの科学的仕事において経験あるいは意識を自らが使うことは否定しなかったのです。そうでなかったとしたら、[たとえば、ねずみの] 迷路での正しい曲がり方や誤りを、そのような出来事の気づきなしに、どのようにして観察できたでありましょうか。

彼らが支持したのは、大胆な一歩 (stroke) ではありましたが、しかし、ジレンマに対する理論的な解決ではありませんでした。問題に対する真に理論的な解決を仕上げる代わりに、彼らは、もろもろの自然科学のある基準に無批判的に忠実であることを選んだのです。すなわち、その基準とは、科学の諸対象は観察されなければならない、というものです。そうして、心理学という科学のために必須のデータを捉えたとの信念の下に、彼らが研究しつつある動物たちの行動を、客観的な反応へと還元することに進んで行ったのです。しかしながら、基準として彼らが用いた科学の理解は、人間と諸事物およびその諸過程との関係に基づくものでした。そして、事物は、基本的に、主観性・主体性が欠如している実体として、定義されているのです。そこで、かれらが動物たちを研究している状況 (場面) は、もろもろの自然科学がそれに基づいて発展し、そのもろもろの戦略、手続き、諸概念を作り上げた、その基礎となっている理論的状况 (場面) には、正確には適合していなかったのです。いずれにせよ、行動主義者たちの行動に対する態度は、主観性・主体性を除去してはいません。それは、単に、それを考えることを拒否しただけなのです。結局のところ、動物たちは、彼らが迷路を習得したり、自ら賞を獲得する学習をしたりする場合には、知覚的经验その他の主観的経験を生き抜いていたのは確かなのです。行動主義者たちがもし異なった動機をもっていたとしたら、ただ動物たちの顕在的な客観的行動だけでなく、その表現性 (expressiveness) を記述することが出来ていたことでしょう。事実、行動という言葉そのものが、既に、一つの理論的還元なのです。明らかなことは、主観性・主体性を無視することあるいは除去しようとする試みは、ジレンマに対する適切な理

論的解決ではありません。さらに、主観性・主体性の無視は、実は、その除去にはならないのです。その貢献をはっきりとは認めないまま、それを用いることなのです。

ちょっと寄り道をいたしますと、私は、心理学の原初的関心は、他者の「表現性」に向けられるべきである、と主張したいと思います。なぜなら、表現性こそは、心理学者に反応可能な、最も具体的で、特定の、相貌的な現前だからです。もちろん、心理学者もまた、自らの具体的で相貌的な「諸印象」で反応します。そして、心理学者の最初の仕事は、ほとんど同時に、他者の表現の豊かさに向けて開かれていることです。そして、自分自身が受けた印象の複雑さを明瞭化させることです。それは、適切に縮小された心理学的態度をとるためなのです。心理学という科学が始めなくてはならないのは、まさに、「表現＝印象」(expression - impression)の弁証法と共になのです。この点については、ここでは、これ以上展開することはできません。

主観性・主体性を除去しようとするのは、行動主義者たちだけではありません。脱構築主義者たちは、実際には、主観性・主体性を仮定しています。しかし、その後で、彼らはそれを完全に取り除こうとするのです。しかし、今度は、社会文化的諸要因が、主観性・主体性を取り除くのに使われるのです。この戦略のよい実例は、Culler (1991, pp. 77-78)によって提供されています。彼は、次のように言っています：

- ・ ・ ・ひとたび主観・主体がその場に位置づき、ひとたび彼が分析的領域の中心に確固として確立されたならば、人間諸科学の仕事は、主観・主体の脱構築化の仕事となる。言い換えれば、主観・主体の把握を逃れる慣習の諸々のシステムによって諸々の意味を説明するという仕事となる。ある言語の一話者は、その言語の音声学のおよび文法的システムを意識的に気づいているわけではない。しかし、彼のもろもろの判断や知覚は、それらのシステムによって説明されることになるのである。主観・主体は、行動を支配している、自分自身の心理的経済について、あるいは、洗練された社会的規範のシステムについて、必ずしも気づいているわけではない。主観・主体は、その構成要素へと分解され、それはまた、慣習の個人間関係システムであることになる。主観・主体は、その機能がそれを通じて作用する多様なシステムへと帰属させられるに従って、分解されるのである。フーコー (Foucault) が書いているように、精神分析、言語学、人類学の研究者は、主観・主体を、その欲望の諸法則、その言語の諸形式、その行為の諸規則、あるいは、その神話的および想像的談話の戯れとの関係において、「脱中心化」してきたのである。主観・主体と世界のこの区別は、変化しうるものであって、ある時点での知識のさまざまな布置、および、それと同時代の諸学問に依存しており、・・・、以前は主観・主体に所属していたものが削りとられ、ついには、主観・主体は、意味の中心あるいは源泉としてのその場所を失うに到っている。主観・主体が、全く超主観・超主体的なもろもろの構成システムへと脱構築化され、分解されると、自己あるいは主観・主体は、ますます、一つの構成概念、すなわち、慣習のもろもろのシステムの結果、であるように見え始める。

確かに、この脱構築主義者の視点には、一つの真理があるとは言え、私には、ある一つのよい事が「偏って」あまりにも多過ぎる「状態に置かれている」、というように見えます。確かに、私たちは、社会、歴史、言語、文化、心理学等などによって、すっかり影響を受けています。しかし、主観性・主体性には、還元不可能なことは何も無いのでしょうか？ Culler でさえ、こう言っています「多様なもろもろのシステムは、それを通じて作用する」と。この「それ」は、単に、その他のシステムでしょうか？ それらを一緒にまとめているのは何でしょうか。これらの文化的影響の総てが強力であることは認めるとしても、もし、主観性・主体性が他の「慣習のもろもろのシステム」に還元されるとしたら、主観・主体内におけるそれら影響の交差作用の意味は、何でありうるのでしょうか。もし、固有の中心が無いのだとしたら、それぞれがそうであるところの特有の統一性は、如何にして構成されるのでしょうか？ 私の心理学が私の「個人的な」歴史と相互に干渉しあう場合、脱構築主義的視点においては、その実存的係留は何処にあるのでしょうか？ さらに、中心化の転置（置き換え）は、中心化の除去と同じではありません。私はむしろ、これら総ての諸要因を、主観性・主体性の中心化活動の、完全な決定というよりは、それへの影響として、理解したいと思うのです。主観性・主体性固有の中心化活動を完全に除去しようとする努力は、行き過ぎなのです。

間主観的・間主体的な次元についての私たちの関心と調和するなら、私たちは、研究者の中心化機能に関しても問うことができます。彼あるいは彼女が研究しつつある人間の主観性・主体性を、彼あるいは彼女自身の主観性・主体性には手を触れないでいながら、縮小しようとするその彼あるいは彼女の動機付けは、何によって説明されるのでしょうか？ 脱構築主義者は、彼あるいは彼女は、彼あるいは彼女に影響を及ぼしているあらゆる社会文化的影響力の単なる所産である、と認めるのでしょうか。この決定論的社会文化的環こそは、まさに、ドストエフスキーの地下室の男が抗議したところのことです。主観性・主体性の鍵となる含蓄（内包：connotation）は、もろもろの経験を、それが如何に一つの独自の視点へと総合するかということなのです。脱構築主義的アプローチは、中心化機能と共に、主観性・主体性の統合的機能も、それに代わるものを見いださないままに、除去してしまうのです。

b) 推測 (Inference) としての主観性・主体性 主観性・主体性を説明しようと実際に試みる戦略も幾つかあります。しかし、それは、明らかに不適切な仕方で、なのです。そのようなアプローチの一つは、主観性・主体性を一つの推測として認める、というものです。Kimbleは、現代の心理学者ですが、このアプローチの実例です。心理学は一つの自然科学であるという見解を弁護するために書かれた小さな本の中で、Kimble(1996)は、主観性・主体性への彼のアプローチを示しています。彼は最初にこう述べています。一つの科学になるという心理学の夢は、百年昔と較べると、我々の時代に実現される可能性は高まっている、と。そして、彼はこう書いています

(Kimble, 1996, p. ix) : 「この議論 (論拠) は、心理科学は科学のもろもろの規則に従

わなければならないという、忘れてはならない注意で始まる。つまり、決定論的で、経験的で分析的でなければならない [という注意である]。」 経験的ということの意味を仕上げる中で、Kimble(1996, p. 2)は、次のように断言します。「他者の心の知識を含む、世界についての知識が、科学に相応しいのは、公共的な観察に基づいている場合だけであるという命題……、入手可能な唯一の公共的事実は、生体が為す物事と生体がそれらをして為す諸状況、つまり、もろもろの刺激ともろもろの反応、であります。」と。それ故、心理学的諸現象が従わなくてはならない科学の基準を最初に確立した後、科学というものは観察可能なものだけしか扱うことが出来ないと述べて、Kimble (1996, p. 19)は、こう書いています。

心理学には、主観的諸概念を合法的にする一つの方法があります。それは、それらの概念を、この科学の公共的なデータから、つまり、それらの概念が生起した諸反応と諸状況から、引き出されたもろもろの推測として扱うことです。もしあなたが、誰かが他の人を殴ったり、あるいは、接吻したりするのを見たとした場合でも、あなたは、その人物の敵意あるいは愛情を直接には観察することはできません。しかし、これらの行為がある状況の下で起こった場合には、それらの行為を、そのような [敵意あるいは愛情という] 私的な状態の表現として解釈することは理に叶っています。

Kimble の見解は明らかに次のことを示しています。すなわち、彼のタイプの心理学は、心理学に本来的に属している諸現象に対して忠実である以上に、ある歴史的文化的に確立された、科学の意味に対して忠実である、ということです。心理学的諸現象が科学の諸基準に適合するよう手を尽くすことには極端な用心が見られる一方、それらの基準自体を受け入れることについてはある素朴さが見られるのです。何故、と私たちは問わなくてはなりません、Kimble は、可能な限り厳密に感覺的所与として定義された観察可能なものに、知識の基礎を限定することを必要だと考えたのでしょうか？ 彼は私たちに告げます。物理学的 (物質) 諸科学 (physical sciences) として理解された科学は、その基準を要請する、と。しかし、物理的 (物質) 諸科学は、主観性・主体性のような現象に対処する必要がこれまで全く無かったのです。この戦略は、諸現象を尋問するというより、諸現象に命令するのです。それだけでなく、Kimble が他者を観察する場合、彼自身の主観性・主体性の役割については、推測をするのでしょうか、それとも、彼自身が現実に経験するのでしょうか？ もし彼自身が経験するのであれば、どのような根拠に基づいて、彼自身の経験を許容可能なものとして受け入れ、そして、他者には、それを許さないのでしょうか？ もし彼自身の内にそれを推測するだけだとすると、如何なる基礎にもとづいて、彼自身の推測の正確さを確認する (妥当とする) ののでしょうか？ 私たちが自らに進んで受け入れることよりも、貧しいことしか他者には無いとすることは、それも、還元論的 (reductionistic) なのです。

c) 副現象としての主観性・主体性 主観性・主体性を認めながらしかしそれを直接に

扱うことを回避するもう一つの方法は、それを一つの副現象であると考えてることによって、あるいは、単純に、身体のある他の部分あるいは神経中枢組織の活動の効果と考えることによるものです。中枢組織とその機能を扱う多数の研究があります。ことに脳についての研究があります。それらは、共に観察可能あるいは記録可能なのです。そして、そのような観察可能なものと経験あるいは行動とを相関させようと試みるものです。しかし、厳密に心理学的な視点から見ると、それらの諸研究は、見当違い (misdirected) であるように、思われます。例えば、生理心理学者のSchneider and Tarshis(1975, p. 3)は次のように書いています。

これらの分野総てにおいて基礎をなしている仮定は全く同じです。すなわち、総ての行動的出来事 (総ての行為、総ての感情、総ての思考) には、それに対応して、身体内で起こっている、ある身体的出来事、あるいは一連の身体的出来事が在る、というものです。そして、それらは、結局は、神経系の化学的かつ電気的諸性質を巻き込んでおり、・・・、如何なる外的な行動的出来事が起こりうる以前に、特定の組合せの内的な出来事 (生物化学的かつ電気化学的) が、まず起こらなければならない。外的な行動の基礎を成すこれらの内的な出来事こそが、生理心理学者たちが研究することなのです。(イタリックは原著による)

心理学者たちなら、行為、感情、思考の [生理学的] 基礎に、というよりは、行為、感情、思考そのものに、[彼らの研究を] 集中させるであろう、と恐らくお考えになることでしょう。しかし、[生理心理学者の研究の] 焦点は、心理学にというよりは、生理学にあるのです。それに加えて、そのような身体的出来事の記録が反映しているのは、主体としての身体の活動か、あるいは、客体としての身体の活動か、という問いは、問われていないのです。

もちろん、生理学的心理学的諸研究は継続すべきです。それは、脳の機能の理解は重要だからです。しかし、そのような研究は、学際的であり、主観性・主体性に焦点を絞った研究に対して補完的 (補足的) なものと見なされるべきで、代替と見なされるべきではないのです。今日の問題は、心理学的貢献が、弱く未分化であることがよりしばしばであることです。Erwin Straus(1966)がかつて申しましたように、「人間が考えるのであって、脳が [考えるのでは] はない」のです。彼はまた、こう指摘しました。総ての脳研究には、少なくとも二つの脳が存在する、一つは研究されている脳であり、これは、どういうわけか、推測されるか記録されている。もう一つは、研究者の脳であり、これは、正常に働いていて、それには器具や機械装置が取り付けられていない、と。

d) 主観性・主体性の物質化 (Reification) 主観性・主体性の不適切な把握に関する最後の戦略は、主観性・主体性は客観化あるいは物質化できるという考えです。もちろん、それは出来ます。しかし、その諸手続きは、主観性・主体性の歪曲なのです。なぜなら、それらの手続きは、主観性・主体性が生きられているがままには捉えない

からです。そのような状況の下では、主観性・主体性は、尋問され [探究され] るというよりは、有りあるいは無しとして指し示されるか、ある研究に含み込まれているあるいは除外されている複数の質の一つを持っているかどうか、指し示される [だけな] のです。

この戦略の一例は、Fenigstein, Scheier and Buss (1975)によって考案された自己意識を測定する尺度です。彼らは、自己意識の個人差を評価するための尺度を開発することを望みました。そして、彼らはこう述べています。最初の一步は、「自己意識の領域を構成する行動を同定する」ことであった、と (Fenigstein et al., 1975, p. 523) . 彼らが自己意識の一つの指標 (指し示すもの) として行動を用いていることに注目することは興味深いことです。それは、あたかも、外的な表れなしには、自分自身について気づく (意識する : aware of oneself) ことが出来ないと言っても言うかのように、なのです。この基準が問題をはらんでいることは、直ちに見てとることができます。なぜなら、彼らを用いている分類の二つは、「内観的行動」と「自分自身を思い描いたり、想像したりする傾向」だからです。観察者は、どのようにして、これら二つの間の差異を行動的に区別することが出来るでしょうか。彼らは、この区別をするのに、言語的表現を用いたとは言っていないのです。彼らの戦略は、また、自己意識は、決定的な時に、現前すると想定していますが、しかし、彼らの手続きは、この事実を保証はしていないのです。さらに加えて、意識の状態そのものは十分に複雑であって、ほとんどの場合、一次元以上 [の内容] を含んでいるのではないのでしょうか。ともかく、これらの研究者たちは、大学生たち [を被験者とすること] によって、一つの尺度を開発し、それを、大学生たちでテストして、医学博士たちを評価するのに用いたのです。因子分析によって、自己意識の三つの異なる状態を定義する三つの因子を提供しています。それらは、公共的自己意識、私的自己意識と社会的不安、です。これらの尺度上で、人がある尺度点を得ると、その尺度点は、その人が異なる諸状況の下で、どのように成功するかを解釈するのに用いられ、その状態に因果的説明が割り当てられています。ここでの、大きな想定は、被検査者たちがその尺度による検査を受けた時点と、彼らの諸課題を遂行する時点との間には、連続性があるという前提です。この想定を支持する証拠は何も提出されていません。

これらの研究者たちは、彼らがこの研究を行った時彼らはどの意識状態にあったかを、報告もしていません。自分たち自身に、この尺度を施行しなかったのです。それは、その他の意識状態が、この研究を行う上では、より関係があるからなのではないでしょうか？ 彼らの研究の参加者についても、同じことが言えないのでしょうか？ ある状況下でのある意識状態の物質化は、それが、もう一つの状況でも支配的で強力であり続けるだろうということを、保証はしないのです。

主観性・主体性を扱う、以上四つの戦略のどれもが、基本的に無効で無力です。どれも、主観性・主体性をひどく還元 (減少) させるあるいは縮小しているからです。では、なぜ、これらの戦略がそのように普及しているのでしょうか、なぜ、それらは、流行り続けている

るのでしょうか？ それらの魅力は何なのでしょう？ 私がそれを知っているかどうか、確かではありません。しかし、私が信ずるところでは、それらの戦略は自然諸科学の戦略と手続きを模倣するために発明されたのでしたし、心理学が一つの自然科学であると無批判に受け入れられことで、使われ続けているのです。主観性・主体性のような現象にとってのその様な戦略の適切性の問題は、主観性・主体性を客観的に研究することを試みる中では、複数の明瞭な難点があるという気づきにもかかわらず、概して、主流心理学によっては、提起されては来なかったように思われます。

IV. 誇張された主観性・主体性

主観性・主体性に、それが受けるべき正当な注意を払っている、がしかし、また、恐らく誇張された仕方で強調している、そうした二つの視点は、社会構成主義と超越論的現象学です。それぞれを、簡潔に、検討しましょう。

a) 社会構成主義：二人の社会心理学者、Smith and Mackie(1997, p. 309)が、定義するところによれば、社会構成 [築] 主義は、次のように述べます。「我々が住み着いている現実客観的に与えられてはいない。それは、我々ひとり一人によって、そして、我々総てによって、構成されている。我々は、我々の知覚を他者と照合することによって、現実についての我々の見解を検証することを求める。ことに、我々と重要な諸関係を共有する、あるいは、同じ集団の構成員である、そういう他者と、照合することを求める。」言葉を変えれば、彼らの見解は、社会的に共有された見解の一致が、我々にとっての現実を、創造する」というものです。(イタリックは原著)

von Glasersfeld(1995, p. 1)は述べています。急進的構成 [築] 主義は、「知識というものは、どのように定義されようとも、人々の頭の中にあり、思考する人間は、彼または彼女の経験を基礎に、彼または彼女が知ることを構成する以外に選択の余地はないという仮定から、出発する」、と。それゆえ、この見解では、世界についての我々の経験に関する決定的な最終の言葉は、個人的あるいは社会的にせよ、主観性・主体性に、明け渡されている、ということになります。しかし、この見解は、世界についての我々の経験総てを現実に説明できるのでしょうか？ 結局のところ、もし、「我々の経験に基づいて」という句を完成させるなら、「世界の (経験)」という語を加えなくてはならないでしょう。私たちの見解を照合しなければならないのは、他者ばかりでなく、世界のさまざまな「所与」とも、なのです。[確かに、] 錯誤は起こります。しかし、それらのすべてが、社会的諸要因によるわけではありません。そのような錯誤の経験を、解釈システムが定常に保たれるように、合理化することが出来ることは、理解できます。しかし、そのことが、本当に、客観的な分析の必要を排除するのでしょうか？ Kelly(1955) の術語「解釈的」 (“construal”) のほうが、そのような現象を説明するには、ずっと優れているように、私には思われます。というのは、この語は、人が反応するあるタイプの所与が、そこから生まれる解釈に対してある制約を与えていることを、含意するからです。最後に、社会的な合意は、現実そのものを、というよりは、現実の意味を構成すると言うほうが、ずっと賢明 (慎重) でありまし

よう。

主観性・主体性に究極的な力を与える第二の見解は、超越論的あるいは構成的現象学として知られています。この見解においては、主観性・主体性にはある水準があって、その水準では、相互主観的で人間の主観性・主体性の特定の形態に限定されていない、とされます。つまり、世俗的 (worldly) な影響を免れており、総ての意味構成の究極的な源泉である、というのです。私たちにとって幸いなことに、この水準の主観性・主体性は、哲学の前提条件であると見なされていて、主観性・主体性に関する私たちの世俗的な諸問題の助けにはならないのです。というのは、人間諸科学においては、主観性・主体性は、世俗的なそれだからです。人間諸科学は、世俗的な事柄や他の人間たちと能動的に関わり、それらに影響される、人間主観・主体を扱うのです。世俗的な主観性・主体性を肯定し承認することは、必ずしも、超越論的視点を否定することではありません、しかし、それを受け入れることを強いられることでもありません。私たちは、この超越論的問題を解決しなくても、人間諸科学の水準での私たちの仕事に携わることが出来るのです。とはいえ、そのような哲学的視点があるということに気づいていることは大切です。

さて、これから、主観性・主体性に対するより釣り合いのとれたアプローチである、と私が信じることを表現することを、試みることにしましょう。

V. 主観性・主体性への適切なアプローチ

仮に主観性・主体性の研究が問題を孕んでいることが示されたのだとしますと、それは、他者の主観性・主体性が観察可能でないことと、私たちの時代においては、知識の獲得は出発点が観察可能性に置かれている経験的基準によって進められているからなのです。そこで、主観性・主体性の問題の根源を確かめるべきであるとするなら、直面すべき最初の問いは、世界のある種の現象は見えないあるいは非感覚的であるかもしれない、と認めることができるかどうか、という問いなのです。知識を獲得したという主張に何の感覚的根拠も無いけれども、でも獲得していると気づくような、そういう知識獲得は、あるでしょうか。この問いに対して、肯定的な答えを出している現象学者が何人かいます。そこで、この問題に関係がある、現象学文献に見出される、四つの区別について論じたいと思います。

1) 物的 (Real) 対 非事物的 (Irreal) :

Husserl (1983) は、ここに、幾つかの洞察を提供してくれています。彼は、空間、時間の中で現前 (presents itself) し、因果性によって規定されている対象 (object) なら、どんなものでも、「事物的」 (real) と呼びます。これが、典型的な経験的对象として、通常、理解されているものです。これに加えて、経験的对象の一つの重要な特徴は、それらが、常に、見え (appearances) を通じて現前する、ということです。そのような場合は、対象全体を一度に見ることは決してありません。そうではなくて、経験している人は、目に見えていない諸局面もその対象に属していると断定 (肯定的に仮定) しながらも、そのような対象のプロフィールあるいは諸局面を知覚するだけ

です。言葉を変えれば、現実の対象の知覚は、その志向されている対象の感じを良く掴むには、たくさんのプロフィールの総合を要するのです。ある現実の対象を良く把握するには、複数の異なる見え (appearances) が必要とされるのです。しかし、Husserl は、意識的行為は、その行為とは独立な非事物的 (irreal) な対象を把握することが出来る、とも主張しています。それらには、現実的な諸対象の諸特徴のうちの少なくとも一つが欠落しているのです。そのもっとも強力な事例は、観念とか数学的な対象です。例えば、正義の観念とかピタゴラス定理のようなものです。それほど強力ではない事例もあります。これらを、Husserl は依然として「経験的」と名づけているのですが、しかし、[経験] “*Erfahrung*”——通常、超越的な対象を含意している——ではなくて、[体験] “*Erlebnis*”——主観・主体によって生きられているもの——という意味で経験と相関しているとされます。例えば、夢は、時間的ですが空間的ではありません。意味は、因果性によっては規定されていません。観念は空間の中にはありません。それゆえ、夢、意味、観念は、事物的な対象では無いでしょう。強度に非事物的な対象のもう一つの特性は、見えによって、見えを通して、現前する、つまり、射映によって現前するのではない、ということです。それらは、直接に現前します。このことは、吟味する必要がある多種多様な局面は無いということを含意しています。唯一の視点性は時間的なものです。今朝の朝食を思い出す場合、それが純粋な現前であるかイメージと混在する現前であるかにかかわらず、ただ一つの仕方、私には与えられています。それをしっかりと保持して、その周囲を歩くこともできます。もちろん、時間を掛ければ、さらに詳細な点を展開することが出来ます。しかし、それらの詳細もまた、ただ一つの仕方でのみ、現前するのです。ときには、望んだ詳細を得ようとしても、抵抗に出会うことさえあります。そして、もし、記憶にイメージが混在していない場合は、そのような現前に別の視点をどうやって得ることができるのかを知ることはさらに一層難しくなります。感覚的でなく見えを欠いた対象の直接的気づき (覚知) を得ることができるということを確認するためのもう一つの仕方は、人が自分自身のことを意識する仕方に訴えることです。人は、どのようにして自分自身の意識を経験するのでしょうか？ 私たちは、意識を見ることも、聞く、嗅ぐ、味わう、触れることも、しません。そればかりか、意識は、空間的に現前することはありませんし、原因=結果関係ですべてを説明することも出来ません。私たち自身の経験を反省するとき、これらの経験の直接的な、非感覚的、見えを通じてのではない把握が、存在するのです。Husserl は、これが、私たちが主観性・主体性を知る仕方なのだ、と示唆するのです。事実、Husserl (1989, p. 69) は、こう書いています。「主観的・主体的なものは、しかしながら、事物的なものに反対している (すなわち、事物的なものに対立している)、一つの非事物的なもの (an irreality) である。事物的なものとは、本質的には、現実 (事物的なもの) と主観性・主体性という形式で、共存している。それらは、一方では、相互に互いに排除し合うが、他方では、既に述べたように、本質的に、互いに他を必要とするのである」。主観性・主体性の現象は、確立されている経験科学的手続きに対する一つの挑戦を提起しています。しかし、それは、この現象を否定する理由にはならないのです。ブラックホールは、同じことを物理学者たちに対して為したのです。しかし、物理学

者たちは、それらを否定するよりは、むしろ、それらをより良く理解すべくその挑戦を受けたのでした。それは、ブラックホールでエネルギーが現れる仕方が全く予期外のものであり、エネルギーについて知られていた総てのことに反していたにも拘わらず、そうだったのです。

「非事物的なもの」(irreal) の話題に関わって、主観性・主体性の諸問題に真正面から対面したもう一人の思想家は、Merleau-Ponty(1968)でした。彼は、古典的哲学から引き渡されたもろもろの分割の大部分、その中には主観(主体)＝客観(客体)の区別が含まれていますが、それらを乗り越えることを試みたのです。私たちが議論していた問題への彼の批判的コメントは次のようなものです。「・・・生きている身体が内部なしの外部になった一方で主観性・主体性は、外部なしの内部となった・・・」(Merleau-Ponty, 1962, p. 56) . 彼が言っていたのは、科学の過度の客観主義が、主観・主体の過度の内部化を導いた結果、両者の間に如何なる関係も不可能になった、という事実を指しているのです。これと対照的に、Husserl は、事物的なものとは非事物的なものとは、本質的に、互いに他を必要とする、ことを力説していました。それらの間には、ある関係がなければなりません。あるところで、Merleau-Ponty (1968, p. 215) は、この関係を、次のように表現しています。

意味は見えないものであるが、しかし、この見えないものは見えるものと矛盾するものではない。見えるものそれ自体が見えない骨組みをもっているのであり、見えることのないもの[the in-visible]は見えるもののひそやかな裏面なのであって、それは見えるものの中でしか現われず・・・それは見えるものの縦列のうちにあり、それは見えるものの中に(透し模様で)描きこまれているのである・・・[M.メルロ・ポンティ著、滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房、1989年、311ページ](強調は原著による)

Merleau-Pontyの、知覚と感覚的経験の再生の関する強調は、見えるものの内部の見えないものを明示的にすることを試みる課題と関係しています。しかし、もし、それが正真正銘「見えない」ものだとする、どのようにして、為されうのでしょうか？ Sallis (1973, p. 56) によれば、「見えるものとしてではなく、せいぜいのところ、見えるものに属するものとして、自らを示すよう仕向けることが出来る[だけである]」。その仕方は、形も色も無くては、絵画の意味は提示することが出来ない、その一枚の絵画の意味が、キャンパスの上の形と色に属しているように、です。こうして、Merleau-Ponty の見解では、見えるものと見えないものとの間には、互いに他への所属性があるのです。私たちの主題に関わっては、このことは、主観的・主体的なものとは客観的・客体的なものに、一つの所属性があるということを意味します。主観的なものを除去したり回避したりするという問題ではなくて、主観的なものにどのように近づいて、それが、自らを現すように(現れるように)するか、という問題なのです。これは主観性・主体性を、科学的企てを含む、その企ての総てにおいて、使う人間にとっては、不可能な課題であってはならないはずで

2) 原因＝結果 (諸) 関係 対 志向的 (諸) 関係 もう一つの重要な区別は、原因＝結果関係と志向的關係との間の区別です。自然諸科学は、常に、原因＝結果関係を探し求めます。実験室の構造そのものが、この前提に基づいています。つまり、もし可能なら、総ての他の諸要因を一定に保ち、そうして、独立変量の従属変量への効果を観察せよ、というわけです。

現象学者にとっては、原因＝結果の諸関係は、人間の内部でも、人間にも、確かに起こります。しかし、この関係は、他を排除するものではありません。人間は、志向的および動機的 (現学的な意味で、心理学的な意味ではない) な諸関係も経験します。志向性とは、意識の諸行為は、それらの行為とは独立の諸対象に向けられているという事実を指します。主観・主体が、もろもろの志向的行為の源泉です。このことは、主観・主体は、自らについて反省することが出来るばかりで無く、常に、世界とその諸対象に向けて方向づけられている、ということの意味します。「主観・主体」という言葉は、そのような行為の源泉としての身体を含みます。それゆえ、主観・主体の観念 (idea) は、意識の観念よりも広いのです。そして、身体主体もまた、志向的なのです。すなわち、身体は、世界に向う、諸能力、諸力、諸運動の中心なのです。それは、また、空間的方向づけ (orientation) の中心でもあります。

しかしながら、原因＝結果関係とは異なって、志向的關係は、事物的な (real) 関係ではありません。事物的な対象との私の志向的關係は、その対象を変化 (変容: modify) させはしません。私が一本の樹木を知覚する場合、その木は、前あったそのままです。その樹木は、空間の中にあり、時間の中にあり、その諸特性は、多くの要因の効果として説明することが出来ます。私のその木の知覚は、時間の中で起こり、一定の空間的方向付けを要します。

他方、私の知覚には、ある因果的諸過程が関わりますが、それらは、私の知覚の総てを説明することはできません。知覚には、特定のプロフィールと主観的意味が含まれるからです。さらに加えて、後になって、私は、その木が不在であっても、その木を思い出すことができますし、その同じ意味に現前することが出来ます。次のように言うこともできましょう。世界の中の諸対象 (objects) を私が知覚しても、その対象を変化させはしないけれど、その対象への関係は、私の主観性・主体性を変化させることが出来る、すなわち、知識が獲得される、と。主観性・主体性が知識を獲得すると、主観・主体は、活動を通して、世界とより良く交渉することが出来る、が、獲得される知識そのものは非事物的な (irreal) 結果なのです。

3) 基体[実質] (substance) 対 同一性 (Identity) :

事物を扱う自然諸科学は、「基体」(substance) という語を、その相関語である「偶然」(accidents) という語とともに、用いることが容易であることに気づきました。「基体」は、ある事物に本質 (内在) 的に属すること、それをそれと成すもの、を指示します。「偶然」とは、随伴 (偶然) 的 (contingent) な諸特性でした。しかしな

がら、主観性・主体性を理解するということになると、同一性 (identity) がより良い語である、ことに主観性・主体性を統合するものについて語ることに問題である場合には、そうであるということ、Mohanty(2000)は、どちらかといえば納得の行くように、論じています。同一性もまた、基体とはかなり異なる諸特性を指示します。Mohanty(2000, p. 84)は、主観・主体の同一性は予め与えられてはおらず、継続的に繰り返し再建されなければならない、それは決して完結しない、と書き留めています。人の究極的な同一性は、人生の経過を通じて確立される同一性のさまざまな水準あるいは、特定タイプの同一性の中では、比較的高い序列に位置する同一性なのです。同一性の達成は非事物的、あるいは、見えない (invisible) のです。

4) 超越的 (Transcendent) 対 内在的 (Immanent) : これらは、私たちが大まかに「外的」(outer) と「内的」(inner) と呼んでいることに対して、Husserl が使っている用語です。超越的対象は世界の中にあつて意識の一部ではありません。内在的対象は、その対象を経験しつつある行為と同じ意識の流れに属している対象です。森の中のある木は第一のタイプの対象の一例です。その同じ木の記憶は第二のタイプの一例です。これらの二つのタイプの対象が経験される場合、つまり、森の中の現実の木と同じ木の記憶とが経験される場合、それらは、意識の志向的对象となり、そのようなものとして、それら両者は、それらを現前させる行為から独立 [原文には independent とあるが、恐らく、dependent の誤りであろう。訳者] ではありません。Husserl によるこのことの証明は、ある対象が内在的であろうと超越的であろうと、多様な諸行為がその同一の対象を把握できるという事実です。内在的な諸対象に関しては、このことは重要な事実です。というのは、そのことは、それに続く表現行為によって内在的な志向的对象を他者にコミュニケーションできるということの意味するからです。このことは、対象が事物的であれ、経験的あるいは非事物的であれ、成立するのです。

さて、これらの区別で備えて、私たちは、元の問いに立ち戻ります。次の条件を満たしながら主観性・主体性に接近するには、人は、どのようにすべきであろうか？ つまり、それ [主観性・主体性] を最適な仕方理解するために、それが現前する仕方に忠実であり続ける、という条件です。たった今行った四つの区別に関して言えば、主観性・主体性に接近する際の歴史的困難の主要な困難とその理由は、理解された主観性・主体性は、最も包括的に四つの区別の総てに渡っているということです。身体化の故に、身体化した主観性・主体性は基体的であり、原因＝結果諸関係に冒され易い事物的超越的对象である、とすることができます。しかし、今述べた命題の強い経験的な諸特性からは、身体化した主観性・主体性は外れて (trails off to sustain) 、志向的諸関係との内在的非事物的同一性を維持することになる、というのも、同様に真実なのです。後者の諸特性は、心理学が自然科学となって以来用いられたもろもろの方法論によって最も傷つけられて来た諸特性なのです。具体的な日常生活は、これらの諸対立をかなり上手に結合させているように思われるのに対して、厳密な科学的諸方法は、一層の困難を抱えているように思われるのです。この等式の頑丈な経験的な側面には、長い歴史がありま

すが、その一部は、既に述べましたので、問題の非事物的な側面について詳しく考えてみたいと思います。この問題に、私は、主観性・主体性とは、世界、他者とそれ自身との志向的諸関係、それら諸関係との非事物的、内在的な同一性である、という視点から接近したいと思います。

さて、この問題に接近するにあたって、私は、ある種のタイプの言葉を用いなくてはならなくなるでしょう。しかし、私の枠組みは認識論的であって存在論的ではないことを、明確にしておきたいと思います。私は、主観性・主体性の知識を得るためには[どうしても]必要であると私が信じているところの言葉を用いるでしょう。しかし、これらの言葉を用いたからといって、そこから存在論への含意を少しも引き出すべきではないのです。これらの言葉の存在論的意味は、この脈絡においては、今の私は扱わずに今後延期することにしておきますが、一つの別個の困難な課題なのです。

ここで明らかなことは、主観性・主体性は、それがどのように経験されるか、——それには内的小および外的視点の両方が含まれるのですが、——ということを経験にのみ接近できるのだ、ということです。内的小な視点からは、内的小な視点は自分自身には限定されないのですが (Merleau-Ponty, 1964)、外的視点には与えられていないような事物を捉えることができます、そして、逆もまた真です。この区別の根底には、しかし、どのようにして、人は非事物的なものあるいは見えないものを捉えるかという、より深い問題があるのです。現象学者たちは、常に記述的に始めます。で、私も、現象学的哲学者たちにより提供された主観性・主体性の一般的な記述の幾つかから始めることにしましょう。

VI 主観性・主体性の幾つかの一般的諸特性：

私が最も密接に追ってみることにする哲学者は Mohanty (2000) です。それは、彼がこの問題を真正面から取り上げ、しかも、洞察をもって取り上げているように思われるからです。Mohanty は、この私の話の初めに私が言及しましたさまざまな同意語の間の区別をしていますが、私は、主観性・主体性一般について語ることを続けることにします。

Mohanty (2000) は、主観性・主体性の観念に含まれているのは、客観的な時間と対比される意味での生きられた時間の中で諸経験が進行する流れ、という内的小心的 (mental) 生活の観念である、と述べています。主観・主体は内的小時間、個人的に意味のある伝記的なもろもろの出来事、を所有している一方で、主観・主体は現実の時間と歴史の中で他者とともに生き、行為し、成長するのです。言葉を変えれば、主観・主体は、社会的環境の内部にもいるのです。主観・主体は、自分自身を、独自にばかりでなく、個人的にも、匿名的にも、一般的にも、理解することができます。それらの特質のそれぞれは、定常的に存在していますが、状況が求めに応じて、その役割を演じるように仕向けることもできます。主観・主体の諸行為と [主観・主体が方向づけられている] 諸対象の関係のお陰で、主観・主体はある安定性をもっており、その

安定性は、意識の変動する諸内容を超越しています。それは、自己同一的な何事かなのです。この自己同一性は、生きられた時間の内的な諸経験に密接に関係しており、ある持続的な同一の自己を構成することに終るのです。それゆえ、主観・主体は、諸経験を吸収するためのある形態あるいは構造であり、その構造はある特定の経験的な流れ(Mensch, 1997)の特定内容によって個性的あるいは独自のとなるのです。経験的構造に本質的(intrinsic)なのは、時間性です。一つの「今」に支配されるというよりは、主観性・主体性の構造は、その「今」を未来保持と過去保持の諸特徴で包み込んでいます。すなわち、未来に関しては予期的であり、過去に関しては保持的で、その結果、「今」は引き伸ばされ、客観的な時間が暗に示すように瞬間的に失われるということは、無いのです。この時間的構造は、心的生活(mental life)の統一性に貢献します。それは、主観・主体の個々の行為が、現前してくる諸対象に一つの意味を付与することが出来るという事実、また、これらの意味が、変化する諸行為と、意識の変化する諸内容にもかかわらず、ある同一性を保持するという事実、そうした事実が、心的生活の統一性に貢献するのと同様です。この過程の中で、すなわち、人の心理生活の流れの経過の中で、時間を経るにしたがい、ある種のスタイル、もろもろの確信、もろもろの習慣と興味関心が開発され、主観・主体が立ち戻ることのできる永続的な所有物となることが出来ます。それゆえ、空っぽの構造が主観性・主体性の一つの意味である一方、この構造は「心的生活の一つの具体的な全体性」にも場所を用意しなくてはならない、という Mohanty (2000, p. 80) にも同意しなくてはなりません。「心的生活の一つの具体的な全体性」：

- (i) 歴史の中で発展し成長して行き、一つの伝記を構成するものとしての、
- (i i) 習慣性の基礎としての、そして、(i i i) 一つの時間的広がり、前後に向けての時間的参照によって統一されているものとしての」(この脈絡に適合するように、幾分変更された引用文の形となっている。原著者註)

主観性・主体性の上記の記述は非常に粗く、あまり組織的でもありません。それは、私が主観性・主体性について受け入れたいと望むことのほとんど総てを含んでいますが、しかし、それは、よく組織されていません。私はまだ、組織化のためのよい原理を知らないからなのです。もちろん、包括的であるためには、もっと多くのことが言われる必要があります。しかし、私は、包括性を求めてはいませんでした。むしろ、主観性・主体性への、異なった接近を要求する幾つかの基本的な諸特徴を際立たせることを望んでいたのです。私が望んだのは、主観性・主体性の現象に対する忠実性は、客観的自然諸科学の視点とは全く(quite)異なる一つの視点を要求する、ということだったのです。

もし、この問題を強調して、Mohanty が彼の記述を得るために用いた方法について尋ねるならば、彼は自分自身の経験について反省(省察)し、自らの意識の流れの中に彼が発見したことを、本質的に記述したのだ、と言わなくてはならないでしょう。Mohantyの批判的な読者の一人として、彼が記述していることが何であれ模倣し、反復しようと試みます。で、Mohanty が、主観性・主体性は、「生きられた時間という意

味での経験の進行中の流れである内的な心的生活を含む」といいますと、私は、自分自身の経験の流れについて反省（省察）し、そして、次のことに気づきます。確かに、私は、ここに座っていて、連続的に流れつつある私の意識生活の異なる瞬間を観察している、そして、同じ空間に私と共にいる他者たちは、私が何を経験しつつあるかについて何も知らない、ということ。あるいはまた、Mohanty が、「主観・主体は、何か意識の変化する諸内容を超えるものであり、何か自己同一的なものである」といいますと、私は、自分自身の諸経験を反省（省察）して、私の人生の過程を思い、そして、学校に入る前の子どもとしての自分自身を思い描き、それから、小学校の子ども、次に、高校の青年、それから、大学の学部学生、そして、大学院学生、それから、若い専門家、そして、終わりに、大学教授としての私自身を思い描きます。こうして、それらの内容は根本的に異なること、しかし、それらは総て私であると言わなければならない、ということ、再度確認するのです。確かに、それら総ての変化を通じて何か同一なものがあります。私は、どのようにして私自身の経験の流れを、あるいは、私の「私のものであること」を知るのでしょうか。私自身のもろもろの経験が私自身のものであるということは、意識の一つ一つの変化と共に現前しています。私自身の経験が私自身であるということも、同じ性格を持っています。これは、一つの見えない (nonvisible) 理解であり、一つの全体としての経験の流れとも、あるいは、特定の変化しつつある志向的な諸対象とも、同時に生起しているのです。そのような見えない理解は、主観性・主体性のある包括的な把握に属しています。そこで、主観性・主体性は、超越的な諸対象と内在的な諸対象を共に把握することができ、それ自体の経験的な流れについて反省（省察）することが出来る一方で、同一性と他者性も理解することが出来るのです。

主観性・主体性についての諸結果を確立するための方法は自然諸科学 [の方法] とは異ならなければならないということは、主観性・主体性が経験される仕方から直接に導かれてきます。主観性・主体性の諸活動 (actions) と経験的与件 (データ) は、フッサールが使うその言葉の意味では、十全に「事物的」 (real) ではないのだ、ということを理解するようにならなければなりません。これが、フッサールの心理学的現象学的還元——超越論的還元ではなくて、——が、心理学および人間諸科学にとって非常に決定的である、と私が考える理由なのです。このことは、私たちが「事物的」であると知っている事柄を基礎に私たちの諸経験を判断するということから、解放してくれるのです。そのような態度 [心理学的現象学的還元] においては、私たちは、私たちに現前しつつあるものだけに、また、その所与がどのように私たちに現前するかということだけに、私たちの注意を集中するように、と指示されます。しかしながら、還元のうちでは、所与は、それが私たちに現前する通りに、事物的に存在しているとは、主張しないのです。言葉を変えれば、私たちの経験の諸対象は現象となるのです。私たちが主張するのは、それをそのように私たちは経験するということを主張し、私たちが経験するように存在していると判断することを差し控えるのです。もし、夢の世界を純粋に経験的な領域の一つのよい例であると考えることが出来ることすれば、その世界では、多くの事物的な基準が緩められていることを知っています。

空間は、努力もせずに、横断できます。あるいは、一つの場所に絶望的にはまり込み全く動くことが出来なかつたりします。事物も人々も劇的に形を変えることがあり得ます。正確な時間的な年代記はもはや成り立ちません。色は事物的な諸法則には従わない、などなどです。さて、私たちの通常の世界の経験を現象的な地位にまで還元した場合、その経験の調整は、夢の世界ほどには、緩くないかもしれません。しかし、同様に、現実的（事物的）基準からは解き放たれていますので、そのような仕方では理解されなくてはならないのです。確かに、経験的領域を導いている諸規則について知るには、現実（事物）世界の代わりに夢の世界をモデルとして使うことで、より多くのことを学ぶことができる、ということかもしれません。例えば、統合失調症の人々の声を、偏執症患者の知覚を、不安な人々によって経験されている状況を、あるいは、鬱病患者の世界を、考えて見ましょう。そのような状況においては、それがフッサールの意味において事物的でないにも拘わらず、現象的な現前が支配しているのです。

以上の事例は総て病理学から引いたものです。で、主観性・主体性の変わり易さ（多種多様さ）の、他の事例の幾つかをお話させてください。Spiegelberg (1986) は、私たちが自らを経験する仕方を研究する」ことに興味をもちました。自分自身をどう経験するかを研究の主題とするとは、変わっていると思われるかもしれません。しかし、そのような経験は、ひとたびそれを詳しく調べ始めてみると、よく知られているところではないのです。Spiegelberg は、自我 (ego) の通常の経験と異常な経験との間の区別をしました。彼 (Spiegelberg, 1986, pp. 53-54) は、単純に次のように想定しました。「自我 (ego) という言葉に対応する何かがある。(そして) それは、直感的な経験の中で与えられている」と。自我の通常の諸経験の中では、Spiegelberg は、自我は体積 (嵩) を持っていること、身体と安定した関係は持っていないこと、を発見しました。「時には、それ (自我) は、身体を越えて広がることもある。また、その他の時には、身体の内部に縮むことがある。時には、身体と同一化する。また、その他の時には、身体から分離することがある」と、Spiegelberg (1986, p. 56) は記しています。彼が発見したところでは、水泳者たちは、自分たちの自我を彼らの身体の皮膚に等しいと経験しているらしかった、と言います。しかしまた、彼は、自分の自我を自分の着衣を含むものとして経験していた個人が多く居ること、それゆえ、自我には身体以上のものが取り込まれていること、を見出しています。身体だけでなくそれ以上を含んでいる自我として彼が挙げている事例には、人が道具を使っている場合があります。例えば、私たちが物を書く場合、使っているペンが [自我に] 取り込まれます。あるいは、乗り物を巧みに乗りこなしている場合、私たちはその乗り物を身体に取り込んでいるのです。

しかしながら、自我がその身体的枠組を満たしておらず、身体の一部のみに位置しているように思われる場合が時折あります。例えば、Spiegelberg は、Erwin Straus を引用しています。Straus はこう書いていました。私は通常、自分の自我を額 (ひたい) のちょうど下のところで、両目の間に、経験している、と。また、ダンスをしているときには、自分の自我を自分の胸の中心にあると経験する、と。自我は、中心

と周辺を持っているようであり、その可動性といえば、その身体を離れることさえ出来、また、知覚された対象あるいは人物と同一化することが出来る、という具合です。また、私たちは皆、俳優たちで、もろもろの役割を引き受けて、殆どまるで彼らは二つの自我を持っているかのように、それらの役割の中で数時間も生きることが出来る人々を、よく知っています。二つの自我とは、一次的に抑圧されている演技していない自我と、少なくとも演劇が終わるまでは彼らの身体を支配している、演技で引き受けた自我との、二つです。

しかしながら、複数の自我あるいは中心に気づくためには、俳優になる必要はありません。Sokolowski (1990) は、主観性・主体性が如何に自らを分配して、異なる瞬間に広げられ得るか、ということ強調してきました。例えば、記憶において、主観・主体は、過去におけるその主観・主体のある瞬間を、現在において、想起します。その過去の状況はその同じ主観・主体のもう一つの側面を同時に現前させるかもしれないのです。もっと単純に言えば、総ての反省というものは、反省しつつある私と、反省されている私と、に分離して行くのです。こうして、主観性・主体性は、言わば、水平的にも垂直的にも広がって現れるのです。しかし、(稀な場合あるいは病的な場合を除いて) それ自体の感覚を失わず、それでいて、基体的ではありえない統一の感覚を示すのです。

VII. 主観性・主体性に対する客観性の意味

もし主観性・主体性がそのような移ろい易さ、変わり易さ、そして、多種多様を示すとしたら、それを客観的に把握しようと試みることは何を意味するのでしょうか。客観主義は、すなわち、ある対象あるいは事態が、ある主観性・主体性に与えられることなしに知られるなどという考えは、維持することが不可能である、ということ、私は既に記しました。客観性はある主観・主体によって構成されます。それ自身だけで形成されはしないのです。しかし、私たちは、どのようにして、悪い主観主義を、回避するのでしょうか。悪い主観主義とは、人が経験することは個人的な意味で主観に依存している、とするものです。基本的には、個人的な主観への依存性を避けることによってです。この解決は、対象が依存している主観性・主体性の水準、タイプあるいは様相 (modality) によってでなければなりません。個人的な主観への依存性は、「目的に導かれた」あるいは「役割に導かれた」主観的・主体的姿勢 (stance) によって置き換えられなければなりません。これは、思われるほど不可能ではありません。たった今、私たちは、以下のことを、見てきました。主観性・主体性は自らを脱中心化できることと時間的に分配できること。また、それは他者の視点の中に自らを位置づけることさえ出来ること。それ自身の過去の諸経験を括弧に入れて、それと同じタイプの新しい諸経験に新鮮に接近することが出来ること。それが、心理学的還元を遂行できること。これは、ある対象への自然発生的な動きから徐々に後退して、その現象的な現前に焦点化することを意味します。つまり、事物的なものとしての対象ではなく、経験されるがままの対象に焦点化することです。また、中心化の機能は、頭から胴へ、そして、その他の処へも、転移されうることも見てきました。そうだとすれ

ば、人間主観・主体は、少なくともしばらくの間なら、その本来的な関心を脇に置いて、他者の諸関心あるいは、ある対象の本来的な諸特性の姿を現させること、もできるのです。言い換えれば、人間主観・主体は、自己関心が自らに及ぼしている支配力を壊して、対象がそのままに経験的な場に入るようにさせることが出来るのです。Merleau-Ponty は、この考えを巧みに表現しました。彼はこう言ったのです。意識は、対象の前で自己を消し去る（葬る）、そうすることで、対象、あるいは事態が、それがあるがままに、自己を現前させることが出来るように、と。主観・主体の自らの関心を消し去る（葬る）一つの態度を採ることこそが、対象のそのもの性（suchness）を露わにすることを可能にするのです。

しかしながら、次のことにも注意しなくてはなりません。すなわち、参加者の側では、つまり、私たちが関心を抱いている諸経験を経験しつつある人間たちについては、主観・主体への依存性が、可能な限り独自にまた個性的に、十分に表現されることを望むのだということにも。参加者の彩り豊かな興味関心の表現は、豊かな心理学にとって、決定的なのです。人々が種々の状況に持ち込んでくるもろもろの傾向、学習、解釈、偏り、情動的な不機嫌、などなどこそが、心理学の材料なのです。人間世界においては、主観的（・主体的）なものを主観的なものとして捉えることが客観的なのです。

それは可能でしょうか？ 再び、私たちはこれまで、主観・主体の可動性の、沢山の事例を見て来ました。自我は、拡大も縮小もできます。身体と全く同一化することも、それから分離することもできます。意識的な態度は、他者の位置を占めることも、あるいは、親密に経験されていたことを一次的に脇に置くことも、できるのです。それゆえ、私たちに、自分たちの興味関心を脇に置いて、対象あるいは他者の、十全なる表現性を発揮させることが出来ないことが、どうして、ありえましょうか。

そのような態度をとることは、保証となるでしょうか。もちろんなりません。それが効果を収めてきた後で初めて、その成功は判断されうるのです。科学の実践は、危険を免れません。さらに、自己の興味・関心・利害を括弧入れすることは、もろもろの他の人間的努力においてもしばしば求められています。例えば、正義の決定、心遣い、不幸な人々への援助、そして、真実の愛、などにおいてです。誤りを免れない人間主体による客観性の追究は、もろもろの弱点を伴います。しかし、それは、その追究をしない理由にはならないのです。

この論文の冒頭において、主観性・主体性の現象を取り入れようと試みるであろうこと、しかし、自然科学として構想された心理学の枠組の内部に留まることを試みるだろう、と述べました。この課題は、達成したかのように思われるかもしれませんが。しかし、主観性・主体性の名において成された幾つもの修正の含意することを探索すべきだとするなら、私たちが用いた枠組はそれらの変化を取り入れることが出来ないということが明らかになるでしょう。しかし、これらの含意の追究は、また別の機会を待たなくてはならないでしょう。 完